特集.7
《西予市》

ジオパークでまちづくり

西予市企画財務部
まちづくり推進課長
高橋　司

●ジオパークってなんだろう？

「ジオ」にはギリシャ語で地球や大地といった意味があります。ジオパークとは、大地に親しみ、その上に成り立っている自然や文化について、楽しく学び、体験することができる「大地の公園」のことです。

私たちは普段あまり意識せずに生活していますが、自然の草花や樹木、生き物などの生態系と大地とは密接な関係があります。また、私たちの暮らしや文化も、足元の大地や周りの自然、生態系によるところが大きく、「ジオ」と「エコ」と「ヒト」はすべてがつながっています。さらに、地域で生産される様々な食材は、「適地適作」という言葉で表されるように地質や地形、土壌、水、気象などと深い関係があり、まさに「ジオの恵み」と言えます。

ジオパーク学習

●地域の現状と課題

西予市は、平成16年に海から山までの5つの町が合併してできたまちです。

西に広がる宇和海沿岸は、近くを流れる黒潮の一部が流れ込むため、雪も降らない温暖な気候ですが、出入りの激しい入り江と海岸まで迫る山、急に深くなる海といった特徴を持つ典型的な「リアス式海岸」です。深くて静かな湾を利用した養殖業がさかんであり、先人たちが造った見事な段々畑では、太陽の光をいっぱいに浴びた美味しいミカンが育っています。

また、東端に位置する「大野ヶ原」は、今から3億年ほど前のサンゴ礁が1400mも上昇したカルスト高原であり、

4億年前の地層（須崎海岸）

リアス式海岸と石灰岩の段々畑

大野ヶ原の牛とカルスト台地

宇和盆地のわらぐろ

四国でありながら冬にはたびたび銀世界となります。積雪が1mを超えることも珍しくありませんが、そこには集落が存在し、地形や冷涼な気候を最大限に活用した酪農や花き類の栽培などが積極的に営まれています。小規模ながら小学校もしっかりと存在している天空のカルスト台地です。

さらに市の中心地は、愛媛県最長の川である「肱川」の源流に近い、標高200mを超える「宇和盆地」の中にあります。古くから四国西南部の穀倉地帯として栄え、古墳や歴史的建造物も数多く、「卯之町の町並み」は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

このように多様なジオを有しているため、集落の形態も様々、文化や暮らしも地域ごとに違っています。農産物にも多種多様なものがあり、「西予市の売りってなんだろう」と考えたときになかなかその答えが見つからないのが現実でした。

四国西予ジオサイクリングでのお接待

そのような中、平成23年から開始したジオパーク認定を目指していく活動の中で、この多様性こそが西予市の「売り」だということに私たちは気づきました。西予市の売りを無理にひとつに絞るのではなく、地域ごとに違いのある地域資源を掘り起こし、それらの多様性を西予市の強みとして売りだす取り組みが、まさに「ジオパーク活動」だと思うようになりました。

●ジオパークは漢方薬

ジオパーク活動は、地域遺産を守りながら、教育や地域振興に活用する取り組みです。

「ジオ」と「エコ」と「ヒト」をつなぐ為の大きな役割を演じている市民ジオガイドさんたちは、ジオパーク学習会や研修会に参加し、スキルアップを図りながらジオツアーの来訪者をお迎えしています。

また、市内の学校においても、ジオパーク学習を地域学習や防災学習としてとらえていただくようになり、多くの学校で様々な活動が広がってきました。2015年度全国防災教育チャレンジプランでは、市内の皆田小学校が全校で取り組んだ「ジオと向き合った防災教育」が全国2席を受賞しました。

その他、農林水産分野や健康づくり、スポーツなどの分野でも「ジオ」を切り口とした活動が生まれてきました。

ジオガイド付きのツアー

ジオパーク認定を受けて3年目を迎えています。少しづつではありますが、市内にいろいろな形でジオパークへの取り組みが広がり、西予市としての一体感も生まれてきたことを実感しています。

山陰海岸ユネスコ世界ジオパークの、ある専門員さんの言葉です。「ジオパークは漢方薬のようなもの。続けることでじわじわと効果が表れてきます。」

私たちはこれからもジオパーク活動を続けながら、元気なまちづくりを目指していくつもりです。